

Inches

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

Centimetres

KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

Kodak  
LICENSED PRODUCT

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

White

3/Color

Black





へ13  
2913  
26

昭和  
月  
日  
年  
購  
求

貞操婦女八賢誌 八編下

東都

為永春水編次



村田

第五十一回  
夢而不夢一級の首  
疑似不疑賢女の意

登時岩熱泡之助の思ひがけるき典物が其身の素生言  
きつるり父を害せし度よりして巧み伎倆一奸計を  
聞きふ再び胃潰は須臾苦痛もつとるくまを怒る  
面色血をくまらる眼ぎくまき凄く憤怒の声をあはして  
噫残念や口惜や俺幼年の頃もは六你が素生をある

女八賢五輯の六



すくもなく況や父の亡かひしを以病死との一筋みおのひ  
遠へて一毫も你が所為と悟らざる此身の不覚の夫のそ  
るを俺の家督を嗣とせし我名はついでにさきごとく你  
家を狭めし且み快らねども亡父の遺言と言ふ  
是非なく阿六谷くと現在親の懸言る汝が下風の順めて  
我年月をるせしと草葉の陰より父上の言甲斐ありと  
思せし人恨み只の一更なるに俺を飽ませ欺きて  
這山中で人知れず殺せたり我妻と縁て定まる  
於由まを側妻おせんといふ事らぞや候令次癢い負ふ樂

恨も重なる汝が細首討て此ま死ねばさう最期の一太刀  
受て見よと白刃を杖の立りよりうらめしきを端ちり  
砍つて蒐るを更ともせむ左辺右辺をうらめしき  
所を典物が豈を飛して泡之助が刃を丁と蹴落し  
絶ぬたりりみ打嘆ひ身小も應せぬ其腕立及たぬ更と  
あきくめて草葉の陰より典物が於由の圍の加さるるを  
浦山へ眺めて居よとや能きやとみ苦しきつらん  
引道すこしとて得させん覺朝せよと言ひつても再び右  
手に取直は刃の下み露と散る命も淡き泡之助が花の







姑且の忙然として居らうしが自ら宵を撫おろし暮角の  
汗を拭ひつゝ物と汗のさる湯息と俱に四下を見まはせば  
精寐の間は日の暮けん春の夜るまは速くも更て  
九日ひまりの月代さへたや山の端をとるまはさへ八代は  
まご懸るまで吐裏小意ふかり意鈍まや余るあても昨と  
今の戦ひは些の勞まのありとも此辻堂小憩ひしき  
日の暮るまも覺へざして漫の熟睡をころころ我身  
あつても不覺の本姓除の賢女等小譚らば笑ひのさね  
ともありぬべし夫小然ても訝しき一睡の間は見え愛あり

素より愛の喜怒哀楽の心あうくある時の忽地眠り  
愛を見る余まごも虚愛あり正愛あり只一崖小捨べ  
くは又信どまごのにもむまごと老方人の言へるを愛ぬ  
思ふよ愛は其人の常た心にあのい度を大く見る物なる  
べし亡目の愛小形を見た龍耳の愛小声もさきも則ち  
此理小愛まごなり然るふ今見え一掩愛の夫小替て今日  
まごも竟小一回見も別まね岩鞍人の羨悪存亡ある  
まごの思ひねごも羨小一も見一愛が笑のさるらんぬ  
那泡之助が非業の犯ハ言ふて返らぬるまご途小残り

女八賢五輯の六











又寐の爰を結ぐんと再び柱へ身を寄せても春の夜  
風の吹入を更行くまふ肌寒く寐るもなやふ種  
種と身の行末と来方と思ひまらるゝ然て又さうに  
知る三賢女お梅青柳の方へ落さうけん氣がさまひ  
只是のさうも昨日洲寄の戦ひより物まらう討まら  
生死のやどもおまらねいお安の奈らるうつらんを友を思ひ  
身をおのひ心の信あふくとも听人もるさ辻堂に声  
まらふ只松風と谷の清水の音のさうりける斯て時刻の  
うのゆるぞ稍明近くまり頃ゆるや為けん八代  
俄ふ公地例もど持病の瘻の起りし物物先つと  
痛とを覺へ身動き逆もさうさうお風にならう  
いふらんと思へど準備の葉もさく只身を胸あか  
當て苦痛を凌ぐたうりたる落る折しも辻堂の母人  
来うる当野の壯夫六七口の声るが中にも託る声張  
上げトキニ皆の流世の中は顔み似合ぬ胆王の太い女  
子ものゆりのよ昨日洲寄の松原と菅領さぬの行刺を  
私妨とや田畝とやどさうひ強ぎをさうりし七遊し依て  
更起り我れも夫役み狩出さま女子がゆ糸を索ぬる

女八賢五輯の六



たぬ昨夜も今宵も追使の草鞋の尻え俺腹え減  
あて強ぎ廻りしあ那女子等が其中心か道とやんか梅と  
やん二個の處女が品草身細六といふ漢人の家小竊  
くふ縣きて居るよを初めあつて稲毛身陣屋へ訴  
出し依り又俺們を品草の村隊小對へと八重助々ふと  
あつて莊夫を植付前の可惜日と村の甲乙うちをらひ  
恁まを間をばい申てハ田の水のさう女房子の腰の下まを  
干のぐらん余のあつたやと言ひくくまは宅の然りあつたり  
と五七人の農夫ども身の膏惜し心泣るを罵言ももら

笑ひもいら最置し言ひ連まを彼方の路へ行いり  
聞く八代まを鴛天偕の件二賢女の速くも討隊を成  
拔て品草村小落延つ漢人の家小病借りあ乍ら人の  
疑ひして訴人せらましものるん遮莫此をばいも早く  
二賢女小報知むば又勢小捕困まま道り道りもあつ  
ま農夫どもが迹追蒐尚も仔細を索ねしうあ討  
隊のくらぬ其先小品草村小弛ゆる二婦が難を救  
むば據て誓ひを結びる心の信小背くべし噫余らと  
矣預ぐ我とふら身と起せむ又もやう込む胸先の

女八賢五輯の六



瘡痛の冥元（あやふ）とつきて屍居の堂と休まりまき再び  
 起りぬらまねば這の口惜しと八代（やち）の心ちきりぬ焦燥ども  
 つよく苦痛をげしめて動くゆふぬ惚いねば左やして能  
 りえ右やせんと痛む胸先まき痛め思按ぬ他よりなるもの  
 くらかづくゆふ才角ぬり身の病着の詮術なく阿含（あがん）  
 して有明の月影薄くひらひく赤雲もやうららとて  
 峰とともるきて立昇る松の旭の影浅りてうの辻堂（つじどう）の在  
 込ひまを尚うち外てを居うけける（お梅）品草（しんそう）は七夜（しちや）の夜  
 程の八代（やち）の其日己の刻をらる頃堂の痛との瘡りく入候（いりこう）  
 時刻のぼろくとも品草村の池ゆきと二輝が安否をたし  
 うを尚惚いぬら及死せんと覚期を為ゆくとくぬ身  
 ぼろひして辻堂を出んとあたる冥元の最義し少年の生  
 首をかく決く八代（やち）の眼を定めて尚よく見るぬ甲夜の夜  
 寐の爰ぬ見し那泡之助が面影ぬ一毫たたりぬ異（い）り  
 かけまむぬの中ぬ思ふやう我轉寐せし其後ハ睡もせなく  
 明甘しぬゆの程め此首の堂の内に入らうつらん思ふぬ昨夜  
 真夜中頃ゆ方ともくぬゆの小物這辻堂に這込しを  
 追出せしときゆからん口ぬ吐し一品と落せし音の聞へし心も



付で居たりしが備へ此首をうつらん是を思ひやうせ六備  
 見し夢の正夢にて俺が力を借り典物を送角備の妻於  
 由と申す討せて呉と悟らる此泡之助が幽魂の爲呼る  
 ろん見謝らば然るれば最前け首を怪て来しと思ひ  
 物も又幽魂のさうりて夢の照据此首は我小見せん  
 合せのこの這は只身の推量多う渠夫やどの冥はら  
 縁なき俺身は憑まんよう於由と申すが由縁の人の夢小見  
 せらば忽地小くの典物の討るべき其更らる所以あらん  
 七の兄まき角もは品草村へ往んとする俺も久の宛の  
 折る小色号のみに居りて猶も時刻の逢はらるる  
 婦へのりく危ふる人一人の又見えく夢ふまて見  
 此首を六條小捨て行んはまきかみて益きかうも女子の  
 手性心もくも去るてねて再び首を手に取り上りて  
 見えは面ぎりの竹処中於梅小似る方ゆぞ忽地浮び  
 一田接ゆら公小京預り四辺見まはる最前のりの  
 極ハ飯を包とるる花田絞りの風呂交へる速く首を  
 かし色と品草村へと索ねる路の便宜ハ知らねども  
 御向小又くの農夫が行く道と此道ともいひ方

文賢五輯の六

。十



へこ心ざり置ふまうせて走りゆきける

第五十二回

為を追て原野の亡骸を埋む  
寇を逃して却て其身を捕被

有徳程の八代ハ件の首を携へり不知案内の乃多  
品草村を過ぎり類々の路を急ぎゆぞ稍五町介と  
来り折しも片辺の茂り小草の中我利ともりま  
山鳥の竹のやうん下立て最置く帝強を八代ハ  
何氣も我とありつは是を見らふ先慙や人の亡骸の  
血み深りつは休とてをの山鳥の嘯付て夫が肉を喰ふ

憐れりしと見ゆるを淺間くもまこ表ははて  
合するもえり尚近ありて熟く見る小衣服の模様  
何もろも那美小見し泡之助の此も遠のぬのそり首  
るき死骸でひりくく板を昨夜見し後ハ焼が推量  
遠ひるく此泡之助の靈魂の我を憑きしものるん夫と  
知りつ亡骸を此原野辺の捨盡て鳥の腹を肥さんハ  
公の信りき小似たり折方と急ぎ折りともせめて這  
込へ堀埋て死骸ハ懸し得きせんと言ひつ四辺見え  
る傍の丘小亡骸とる速く埋ひる賢女の才覚を



変果て八代へさるる路と表ざりて尚幾十町の池を程ふ  
人家多く建連り病場めきさる野も出けり八代へ  
這里にそ風さる腹をつくらひら品草村へ趣つべさるの  
便宜を同れ須臾も猶豫せざ此里をも又立ゆて  
走るゆぞ稍申の刻さるる所箭口の渡りの川岸まが  
豆にほせて狂付しおまこりや起る胸先の痰痛ふ豆も引  
きねハ河辺の茶店お立寄りて飯床お腰をうち掛り  
おふらびのやあささし痰をおさえて在るやとふ日ハ西山お入  
来て四辺小暗くありとろ漸く痰痛のおさるる

本店を出んと為さるとさ郷お花田の風呂表ハ色  
お携へ来一件の首をよみ取りあげより見らふ風呂  
おへ同ト花田の絞りでもお野中さ遠ふて見ゆるゆぞ訝  
お少結び目をよ速く解て推開けバ首はあつて男の衣  
預叔ハ今も我側お休を居る壮俊が取遠へしお控  
らば首とあつて好品と思ひ遠へて持替しつゆは那  
奴が野為さるん遠くへ行ト遊ひ當て取返さば我信も  
徒まるとありぬらん然るややくとろち京預取替られ  
小色を基の如くお締をんとて又よく見は風呂しきの











胆と濱し八代の猛火のうらみの近入のてお梅お道を尋ね  
 ろふ四辺の人氣も見へざれば扱ハ時刻の逐まじくゆゑとや  
 二賢女の討隊の為の捕へらまじく討まじく備拵よくそ  
 砍抜し左中も右にも毛より直の縮毛の陣呵へ赴きて  
 得と実否をさぐりしうぬ再び思按をぬぐらきんと言ひり  
 其呵を立出て濱辺の濡みて二三町基来一方をといく  
 折りしも向ふより来る寝の挑灯の夜更さんと八代の片  
 辺の茂りし藪蔭の躰且て形勢を變ふとまじく近づく  
 挑灯の光アふよりとまじく見らぬ先ぬ我も一箇の武士ハ

縮毛の陣呵の暇代多うん羽織野袴のりりまじく買くの  
 殺六を後へする後方より追来る一名の壮俊くうんぬ  
 へまじく守留めゆら罵り其声の濱辺の寄る浪音ぬ  
 海をこりくハ听取まねどお梅が首を討取りし一褒  
 褒の金を呉まよと言ふをりの侍の関入まじく假令お梅ハ  
 討へたまよお道を逃せしうぬく今さら褒美の巻ハ  
 きハ夫とも欲ふお道をも捕へて出よ其折の望まぬ  
 仁まじく褒美を得させん恠て六言分ちるまどと言ひ捨て  
 那侍の袖うち拂ひ寝兵等を急がし立て行る方を壮俊ハ



尚退の笛んとまるとまき又もや後方より六十むりの一名の  
老女身の縛のまき多ううの仕伎を推止めゆ夏中らん  
争ふと那仕伎はよくも听くは矢庭小老女を小服小抱き  
後辺の繫ぎぎ一漢船の中へ投込を縄を切りより速く  
突出し浪のまふく押流を始終の形勢を覗み八代狭も  
ちら怒りもしく飛び菟らんと思ひしを獨り心と推さる也  
おろ月影ふりの仕伎をよしく見まは響小並前口の  
渡一場で首と色と取替し仕伎のふぞ又響もきて頼りふ  
喘る八代の味を小菫を躍り出りの仕伎と争ふおろくも

忽地雲ふ入る月あまきこのや暗くあるやと基より件の仕  
伎の好む戦ひのうらうらや先小便宜を得るが如く透せ  
れままり列外し音の終まで逃行くと六口惜と八代が  
一むりの焦燥ども案内おぬ道るまは退んとまきりに  
三術あく須史躊躇居うける  
八代の那仕伎を捕逃せし遺恨は只是のまきり響小  
奴が罵りしと小菫小躲きと惶因し小お梅ハ討ま  
一道はまき必死の場所を欣抜けて速くも影を躲せし  
う倘其更の偽りもむどハ生涯苦乐を侶みせんと因せ



一賢女を人よふうけて阿容とくつらまを此世に  
 命ん道の案内へあつたとも命ふうけて社役を  
 索ね出して阿礼一実にお梅が首討しと渠が口より白  
 状其恨を報せし其うあめて俺身も侶の自害と  
 誓ひ一言話を及古ふせし思按ふ及ぶ夏久と獨り  
 意中の夏頭つ祀り行んとまる折しもあつたやどに  
 恐び寄りけん後ろふ窺ふあつたこの殿兵捕つと声うけ  
 ぬを心得うると八代が身を捻りつ右左り矢庭ふ二  
 仙と殿退きまこのや捕ほく殿兵の大勢か或いはと  
 取り豆を取り折重うらく其まふ忽地索とぞうけうり  
 ける嗚呼憐じべー八代那賢女等が其中の武術の  
 殊小勝まふあ多勢の田まきうらうのまが不意を打  
 夏久まふ竟み橋とつらうの不幸といふもあつたや  
 余まども強氣の八代ゆ更にお阿容うらう氣多まき  
 怒る声とあり立て汝等推が吟咄るまは只一言の  
 趣意をも演べど吾侪が由断を見まきと捕捕しを  
 仔細を言へうらうと急迫立折うらまきの捕隊の其  
 中より現つと出る以前の武士片ふみ携り一砍首を

女賢五輯の六



那八代が目先へさうつけあの是賊婦や侍りても尚  
種々言ひ多て身と道とんと争ふや見見よ休が  
同惡の處女お梅の既討取つて首の別ち見あり  
汝幻術つてとてもとや郷傳せ身小受ふ負之動  
ぎも多りハせどお道と名を以て是またの罪の次第を  
白状せよと言ふより先八代目速く件の首見  
るの最前前口の渡場めて摺替らえて失より一の  
泡を助が首あるみぞお梅ハ恙なく此場を速く落廻  
あり命にても這武士がりり情由めて此首をお梅が  
首と思ひあやまう我身とお道と見遠へけん那拉伎が  
做き野馬り開い兎も角もさう当る此身の索目と道  
とびつ二個の賢女の安否をも定ふあるより慥ふまど  
思ふ更ぬ臆る色々故意と言話と和らげておん  
身ハ何事のお方りおねど吾儕の旅の處女にそお梅と  
申さんお道とやさん左極る者なりとぞりまおねと半言ハ  
せん武士ハ怒まる眼を見ひさまて俺を誰とぞ思ひつる  
稻毛の陣野の眼代ある舟月與伊太度寧ろる汝を  
お道と見し眼据ハ今また汝が携へ居し此小色の風呂

女賢五輯の六

十八



品草村獵師 烟六とあるは終明あり  
信ても道々言話やあると思ひがけき風呂しき  
照据の取らるる八代ハ夫いとより口ごもり須臾言話  
あらざるけり

是より後八代が縮毛の陣呀の引目よき既小命も  
危ふきを不と思ふ開処を道れ出武州若鞍の里の処  
貞婦於由の名告會ひ這回にて一賢女出現をたゞ  
物譚のまご盡ねども開はま第六輯の初め説くべし

貞操婦女八賢誌 (和田)



